



十卷勢入好

回

全部未田卷

^ 13
2924
4



門へ 13
號 2924
卷 4

本系 尾屋七
村 尻
右科 米 庄 尾屋七

昭和九年六月
購求

知多
米倉
村

知多
米倉
村

大情 肝 粒 志 後 編 中

○雪少 悦 懐 犬 拵 ぶ 地

江戸

鼻山人著

おのころす 一ツ叶て瓜又一ツ叶のねがら我を 浮世トハ
よく 掃りて 生理あるすト 四ノ入カハ心の
今さらなることらひ 袂して 鳩の 糞を せ 邊
まんと 狗ふ 志あるの 下ツ 拵ツ 糞

押のひきまて 全さかきあらう何事あまのひ
あまのいのおか泊あまされてもあつませ 全ま
えんとらまのほふ某がほふ付してびれ
分ちせらる山の中本想のるも絶果とたか
高き花菱をた右へ押分ち踏あつて
ひきたれぬ日きぶれとらふ凄き舞の
まも密くふまゆら山の中地獄の鬼は
て冥途のる不踏迷ふん死することを悲れし

新く良き 全ひと向ふれが木立
海の中小舟草葺の門撞くあつて
の 全まのいさす是れまひりけ
中の張史あつてもあつてトふふあひあつら
す 全まのいさす内より松花も
く 全まのいさす男をいさす
親方ぬらあれま 全まのいさす
ゆ 全まのいさすあつて迷ひ

其のつらさを付えかゝりと殺針にて毒を
ぶらまへしやあつたれば此の客人の
おんをなすもなすもト情儀身ハダシササ
あやしよアノ穢なる中女の煙六めがけ
人々をばはきく事と為すこの例のいふ
がうあつた押をさすも変化合せとす
毒の毒子を万とさすで彼奴系を逃ちじて
はきくて戻つて江戸の客人のむごらふもの

我仕出と申すはカテト申入トの指二を
渡りしを戻さうとさす入らふる四か人も
金八のいふくんでるあは怖くさうから
内お入とまが座敷のおをえさるるふ
下群被お小豆群又と和と寄集つる金
兵衛座敷と鈴鈴定食屋家半結の分チ
あく五丁五六とるん一と丸とあらびがわ
ようも折の渡れと致會お却々お送致

きつて夕ゆふアおひすとも是これ可たなりトた行さ儀ぎ
立たる角つの大ごう脚り大だいあづらの飛ら漢けん舎しや利り
并なるものさあづらあそ心こロろした姿すがたををるる不ふ愕がく
乗のしてさあれたる山さん絨じゆうの魁かい々さがす
家うあらんト押おしの魂たま非ひ消しょうとえでカか水すい泮ぱん
傳でんのあまあまのめが梁はりさんさんをくく集あつめししを
斬きヤトやとををるる押おしのはささるる比ひとと死したたるる倉くら
猪ちの皮くわののららふふトトワワカカととななるる一い千せんのの子こ

あづらあそ一いままててららすす舞まのの養やう業ぎやうららららをを
がらがら四よ方ほう人にんふふああひひのの因いんままああのの提あのの教きやう
一いのの廓くわくの中ちゆうをを延えん落らくしてして出でるるトトハハ今いま忽がのの
危あやいい物ものををまままま仕し負おせせてておおががハハテテ金かねと
銘めい換かんのの身みののららるるががけけ進しんららよよふふトトををれ
切きりり不ふ捨すてててささらら道どう理りののああららハハ方ほう四し方ほう一いをを
上うへへにに必ひつずずをを搜さうすすハハ知ちれててああるるのの一い足あすすをを
られられ捕とらままるるはは是これおおででままらら方ほう苦く患わんをを一いた

のいこのおたやまをてん方の^{ついで}の^{まじ}をアノ
妻^{あんな}集^{あつ}つゝ奴^{やつら}をふまゝにそのうちで一人の
ちや耳^{みみ}がら^まのあハイヤその女^{おんな}の慥^{しん}うふをせう
松田^{まつだ}金の^{かね}倡^{うた}妓^ぎ田^た方^{かた}人^{ひと}ト^らよのであらう二と
日^{あした}流^{なが}廓^{くわく}を^あ紅^{べに}落^{おち}ち^まあれど妻^{あんな}向^{むか}ハ^ま病^{びやう}ま
ぶん^{ぶん}え^え付^つテ^てあ^あ〜[〜]と^と思^{おも}ひ^ひま^まら^ら骨^{ほね}形^{かたち}賃^{ちん}入^い
二十^{にじゅう}あ^あ尋^{たづ}ね^ねを^をせ^せし^しお^お出^です^す穉^ちが^が餅^{もち}ト^とや^やは^はし^しこ^こが
的^{てき}切^きり^りア^アノ^ノ煙^{えん}六^{ろく}め^めも^もその^{その}吐^つき^きを^をせ^せぬ^ぬら^らう

令^{せい}ト^と精^{せい}ん^んで^で幾^{いく}も^もト^とお^おの^のま^まま^ます^すト^と油^{あぶら}燈^{とう}
の中^{なか}での^のめ^めの^の清^{きよ}り^りま^まア^アは^はや^やる^るな^な山^{やま}と^とま^まま^まで^でも
速^{すみ}ふ^ふ船^{ふね}ま^まる^るが^が幾^{いく}も^もり^りふ^ふ里^{さと}令^{せい}連^{れん}の^の綱^{なわ}茂^も
張^はて^てま^まい^いり^り洗^{せん}ふ^ふ捜^{さが}され^れち^ちや^やア^アせ^せて^ても^もえ^え付^つれ
お^おの^の方^{かた}の^の形^{かたち}容^{よう}チ^ちう^うり^りふ^ふ出^でら^られ^れぬ^ぬ女^{おんな}の^の
う^う人^{ひと}あ^あれ^れが^がま^まア^ア甘^{あま}が^が肉^{にく}ふ^ふあ^あり^りト^と月^{つき}邊^へま
して^{して}世^よ界^{かい}の^の風^{ふう}流^{りゅう}も^もう^うす^すら^らぬ^ぬト^と時^{とき}分^{ぶん}あ^あり
そ^そり^りト^と出^でる^ると^とく^くる^るを^をす^す相^{あひ}様^{さま}の^の梅^{うめ}田^た村^{むら}へ^へ行^い

道も知れて掛のふスニキヤのうりちり整とのき
きいハ掛のふせんニのおまふまのま
毎で酒をト上ケふびせんすトようて
掛んあへト大男ア掛んあふまひのあせ
駕ののめコ某等コのえあ親あのふせ結ふ
あるのふ人何の掛人がんまひとしな
さる次の掛人ト掛んあふまの掛んあふまの
がまアトトあつあつけたの某人もある

おからお意の純きして是うらう人で糸
あらしてのモウキの掛んあふまの掛んあふま
あらおかりトイセうト大男トそれでの結付ク
おまで又重けてならぬトトハテならぬモウ
掛田村の中にあらぬをあらすトらうくお
あらして出立ぬらる風情ハ大男あらる
我く風情のよらしうららるふたまをあらすも
大男アその中にあらぬとあらすあららぬ



さまきひめぐんすすめくヨリヤア押のひきぬれ死
 をしおあり中しし十四方人が動りお座ひ驚
 の老徳ともお喉をくと立ちおれが回母方
 さんへ御筆よましくりめをさへせしえあつる
 次女えさるる身は空とものを争くゆゑせし
 大おあり難くむづかしくしつ回母のむす
 ぶらんす

契情行粒志後編中終

八

